

翻訳 中国漢劇『曾根崎殉情』

——日本公演上演台本——

向 井 芳 樹

原作 近松門左衛門（日本）

改編 向井 芳樹（日本）

方 月仿（中国）

翻訳 李 国勝（中国）

向井 芳樹（日本）

演出 高 秉江（中国）

九右衛門 男 五十余歳、徳兵衛叔父 大阪「平野屋」主人

九右衛門妻 女 四十余歳、徳兵衛叔母 内儀

妓楼主人 女 三十余歳、「天満屋」主人

お 春 女 十七歳、「天満屋」抱え遊女

長 蔵 男 十八歳、「平野屋」丁稚。

駕籠かき 男（老人）

駕籠かき 男（若者）

九平次友達 男（一）

男（二）

男（三）

登場人物

お 初 女 十九歳 大阪曾根崎新地「天満屋」抱え遊

女（邱玲）

徳兵衛 男 二十五歳、大阪「平野屋」醬油店手代

（熊国強）

九平次 男 二十六歳、大阪「油屋」主人（王立新）

場面

一場《重逢》幼なじみの巡り会い 大阪街角・天満屋内

二場《逼婚》親方からの無理な縁談

三場《求神》一景 恋の祈りの観音巡り

郊外

二景 恋の嫉妬の悪巧み 生玉本誓寺

四場《討債》力づくでも返らぬ銀子 大阪街角・酒屋前

五場《情念》悲しき出会いも今宵限り 天満屋内

六場《殉情》死に装束は花嫁衣装 道行路上・曾根崎の森

第一場

一八世紀の始めの ある年

日本 大阪 天満屋 妓楼

幕開く

歌声、三味線の音、笑い声、賑やかに聞こえて来る。

九平次・徳兵衛 下手より登場。

九平次（歌） 友と連れ立ち、野山の遊び

徳兵衛（歌） 浪速の夜の、灯し鮮やか

九平次（歌） 俺とお前は、遊びの仲間

徳兵衛 おや

（歌） 思わず至る、新地・天満屋

もおし、九平次兄さん、私はこれにて失礼します。

九平次 徳さんよ、それはまた、何故に。

徳兵衛 ええ、お店の主は叔父叔母御、躰厳しく廓通いはもつての

外、ここはどうでも帰らねば、これにて失礼、さらばでござる。（急いで帰ろうとする）

九平次（徳兵衛を捕まえて）我が弟よ。

（歌） さて人の世は 空しきものを 今の今こそ

遊ばんものを

九平次は徳兵衛を連れて、天満屋に入る。

妓楼主人（愛想笑いをしながら）はいはい。お二人様。ようこそ

お出で。どうぞお上がり。

お春、お恵よ。早く、お茶を。

お春、お茶を捧げて出て来て、二人の前に出す。

妓楼主人 お二人様には、お春とお恵が、お相手で、よろしうござ

いますか。

九平次（軽薄な調子で）ああ 良い 良い。おい 徳さんよ。お

初を呼んで、歌聞こう。中々の聞きもの、心も晴れようぞ。

徳兵衛（独り言）ええ、お初。

九平次 どうして、お前は、お初を知っている。

徳兵衛 ええ、花車さまにお尋ねします。そのお初とは、石上村

（いそのかみむら）の出か。

妓楼主人 その通り、お初の在所は石上村。

一場 重逢



徳兵衛 今年、お初とやらは、何歳か。

妓楼主人 確か、十と 九歳。

徳兵衛 (疑がわしげに) 本当に、お初とは、あのお初かな。

九平次 (からかいながら) はは、はは。これはまた、徳兵衛は隅に置けない色男、ええ、はは、はは。

徳兵衛 いやいや、自分でもなかなか信じられないところ。在原郡

石上村は我が在所、そこには、幼なじみにお初という娘ありしが。この天満屋のお初とは、会ったことも、見かけたこともないものを。

九平次 それでは、どうぞ、御一見あれ。

徳兵衛 (急いで) それが良い、それが良い。

九平次 早く、お初を。

妓楼主人 はははは、承知致しました。お初お初。

妓楼主人退場

九平次 徳兵衛よ。いまだ見ぬ麗し人に心動くか。はははは。

お初 古い琴を抱えて登場

お初 (詩吟) 幼なきころの 恋心 今は夢かや 廓住まいに

琴弾けど 気も晴れやらず

私に会いたきお客様、お二人とか。

徳兵衛 (声をかける) お前が、お初か。

お初 はい、私が。

九平次 お初よ、こいつは俺の親友で、平野屋と言う醬油店の手代の徳兵衛。徳兵衛様よ。

お初 徳兵衛。(じつと見詰めて) 徳兵衛様か。

徳兵衛 (驚き、かつ喜びながら) お初さんか、お前は。お前は、どうして天満屋に、どうして遊女に。お前のご両親は在所か。

お初 (心定まらず) はい、はい。年貢は全部取めました。私は、私は。ええ、徳兵衛さんが大阪に来ておられるとは知らなんだ。在所の、在所の皆様、ご無事かや。

徳兵衛 無事、無事。

九平次 おい、これは又、なんと幼なじみの巡り会い。ええ、芝居の舞台を見るような。お初、今宵は我らの慰みに、なんぞ良き曲弾いてくれ。

お初 (笑みを含みながら) 九平次様、あなたは、いつものおなじみ様。どうぞ、お好みの曲をお定めあれ。

九平次 (愛想なく) 任すべし。

お初 それならば、我が故郷の、古き民謡「筒井筒」、歌いたきものよ。

お初は徳兵衛に目で尋ねる、徳兵衛も黙ったまま承諾の合図

をする。

九平次 (酒を飲みながら) 良い 良い。早く歌うべし。
お初 お聞き下され。(撥を取り、琴を弾く)

(唱) 桜花 盛りの後に 実りなく 待つことの 久しけれど 客もなし ここに歌はん 故郷の「筒井筒」なる古き歌 愛しき夫を 待つ妻の 悲しき歌
と人の言う

(歌) 夫を恋うる 人の名は 井筒とこそや いいけらし
時も所も 古きこと 石上村の物語 隣に住むは
在原の 業平という 優さ男 井筒とやらと 幼な
子の 幼きままの 恋心 井戸に袂を 並べては
清き流れに 戯むる 冷たき水も 春の来て 温
みてこそ 恋心 月日の立つも 早きまま ともに
見交わす 顔と顔 男は恋の 心をば 和歌に表し
伝えける 女は恋の 心をば 高らかにこそ 歌い
けれ 百年もとの 契りも永く 永遠とこよに 離れまじとぞ
この世の夫婦 一つ家 あの世界はちの蓮 比翼塚 花
咲き花散り 年月の 移り易くて 業平の君も は
かなや 去りたまう 昼はひねすも夜もすがら 悲
しみとても 晴れやらす 筒井筒の 井戸の辺りを

第二場

数カ月後 大阪 平野屋醬油店

開幕 中幕は降りている。

九右衛門妻 ろばに乗って登場。長蔵お供についている。

九右衛門妻 (歌) めでたいことよ 姪のお芳と 甥の徳兵衛 二人の縁談 取り纏め 結納金の 三貫目 収めて帰る うれしやな

長蔵 お内儀様、お気を付けて、お降り下さい。(ろばをつなぐ) おおい、お内儀様のお帰り。

九右衛門 登場

九右衛門 (歌) 不肖の甥は 困り者 廓遊びで 浮名を流す

九右衛門妻 あなた

九右衛門 (歌) 今日よりも あなた様にも お心休め ご安心

九右衛門 (喜んで) お前が、そういうからには、徳兵衛との縁談、お芳の方は整ったのか。

九右衛門妻 お前様、ご覧下さい。結納金納めて参りました。

九右衛門 よし よし。(急いで) 徳兵衛、徳兵衛。

長蔵 ご主人様。手代さんはきつと天満屋へ、まだ帰っては

さまよいて 亡き夫を 慕う涙の 絶え間なく は

かなき花の 命こそ いつか絶えなん 筒井筒の

井戸を冥府の道として 先立ちし 愛しの人と 巡

り会う 筒井筒の 井筒に近き 松風の 人待つの

声の いか寂しき

九平次 百年の、契りも永く。あの世の蓮、比翼塚。歌の文句も、

歌も良し。お初、我が九平次様は、比翼の塚は御免なれ、

今宵は、しつぱり一つ塚。

お春 (お初と目配せして、わざと色っぽく) 九平次様、あなた

様は、今宵は酒が過ぎました。どうやら、私と早々と、一

休みなさるが良からうぞ。

九平次 (迷いながら) お前が、俺と。

お春 (色っぽく迫りながら) お前様と。どうぞ、御出でを。

九平次 はははは、俺の今宵の相手とは、死神様か。

お春を引きずりながら、退場

徳兵衛 (回りを窺い、激しく) お初。

お初 (心を込めながら、恥ずかしげに) 徳兵衛様。お恥ずかし

や。(泣き止まない)

二人は激しく抱き合う。

溶暗。幕降りる。

参りません。

徳兵衛

九右衛門 (怒って) 天満屋、天満屋。お前、早く行って、徳兵衛を連れ戻して来い。

長蔵 はい、手代の徳兵衛、探して参ります。

長蔵 退場。

九右衛門妻 お前様

(歌) ただ心配は徳兵衛の お初に迷い 拒むこと

九右衛門 女房よ。

(歌) もしも 縁談拒むなら 店から追い出すまでの

こと

九右衛門

長蔵 内から叫ぶ。「手代の徳兵衛、帰りました。」

徳兵衛 喜び勇んで登場。 長蔵 従って登場。

徳兵衛

徳兵衛 (得意げに) はははは。

(歌) 天地神明 天満屋の 神かけ誓う 我が恋は

水の流れと 絶えもせず 愛しのお初 身請け

九右衛門

して 帰りたきもの

九右衛門妻

叔父御、叔母御よ。ご覧下され。

(歌) ご主人様 ご夫婦に 華燭の宴を 願いたし

(にやにやしなから) なになに。華燭の宴を願いたし。

お前は、それでは 承知せしとか。

徳兵衛

叔父上様に申し上げたきことのあり。我とお初は、幼

なじみの仲の良き、不思議の縁あればこそ、この大

阪で巡り会い、結びの誓い交わしたり。お初の普段蓄

えし、銀も積もりて一貫目、我また日ごろ蓄えし、銀

も同じく、一貫目、叔父上様が、その上に一貫目、お

貸し下さるものならば、併せて三貫目の銀になる。こ

れにて、お初の身請けを済ませ、我ら二人は華燭の宴

を。

何も言うな。我が九右衛門の家はな。代々商い一筋の、

堅い堅い町家なり。そこに新地の安女郎、何ゆえ、我

が平野屋に入れられようか。

叔父上様。お初の両親病にて、年貢の為の、身売りな

り。お初も拙き定めにより、苦しき流れに身を落とす。

お初には何の罪もなきに。

つべこべ言うも、無駄なこと。

徳兵衛、聞きなされ。今日は、私は結納の三貫目持ち、

お芳の家を訪ね、めでたく縁を取り結ぶ。この縁談に

従えば、お前ら夫婦に、平野屋の家業をつがすが、ど

うするぞ。

叔母上様、私の心には、お初が住む。お芳様の縁談は、

これきりにして下さいまし。いかに親方様が反対なされようとも、私は何とも従いがたし。

九右衛門

(我慢出来ない様子で) なにを、わがままな。お前は、お前はいつでも、この俺の言うことを聞かぬとか。

徳兵衛

死んでも、聞かれませぬ。

九右衛門

(怒りながら) 死んでも、聞かれぬ。死んでも、聞かれぬ。お前は親に死に別れ、俺が引き取り、成人させ、今日あるを忘れしや。まあ、良し。お前は早々に、結納の銀三貫目、取り戻し来よ。その上、俺と平野屋、捨てるが良い。

徳兵衛

叔父上様。

九右衛門

俺は。お前の叔父ではない。

徳兵衛

叔父上様、このお話は、真なるや。

九右衛門

真なり。

徳兵衛

本当に。

九右衛門

本当の、本当の。

徳兵衛

(ひれ伏して) 叔父様、私めには、すぐに銀子をお返し出来ませぬ。しばしのご猶予下されかし。なにとぞ、九日間のご猶予を。

九右衛門妻

どうぞ、徳兵衛にしばしのご猶予、与えかし。あなた様。

九右衛門

よし、今日は七日、来月の今日の七日まで、待つてやる。ただし、期限を過ぎるなら、この平野屋を追い出すばかりか、この大阪にも住まわせぬ。

徳兵衛

(毅然として) きつと、必ず、お返しを。

徳兵衛

徳兵衛は振り返らず、さつさと店を出て行く。退場。

九右衛門妻

(呼び掛ける) 徳兵衛、徳兵衛よ。

九右衛門

呼ぶな、俺はもう、死ぬばかりなり。

第三場

前場より二十日余り過ぎたころ

大阪の郊外と 生玉本誓寺

九平次 内より「さあ、行こう」と叫ぶ。

九平次 日傘をさして登場。

九平次

(辺りを、走り、歌い、話し、舞いながら)

(歌) 愛いとしいお初が 悩みの種よ 徳に出会つて 俺を

忘れる 今日はお初は 客に誘われ観音巡り そ

こで俺様 日傘をさして 一張羅着込んで 伊達

者きどり 美々しく着飾り いざいざ行かん

つまづき倒れる。起き上がり 退場。

お初 内より 歌う。



三場 求神

お初 (歌) 駕籠に揺られて 観音巡り ゆらりゆらゆら
らゆらと

お初 駕籠に乗り、年寄りと若者の二人の駕籠かきに担が
れて登場。

お初 (歌) 難波津の町 賑わしし 老若男女 数知れず 朝
に拜む 観世音 衆生済度の 有り難き 祈りの
人の 数知れず 潮の満ち来る ごとくなり

駕籠かき(老人) お初様、お静かに。さあ 出掛けませう。

駕籠かき達とお初の 坂を登る振りの三人の舞踏。

駕籠かき(老人) 着きました、着きました。お降り下され。お初
様。今日は大変暑き故、さぞかし、駕籠は蒸し暑かろう。

駕籠より降りて一休み、一休みして出掛けましょう。

お初 さあ さあ。一休み、一休みして、出掛けます。

(駕籠より降りる)

(歌) 徳兵衛様と わたくしと 必ず結ぶ 縁よちにて
再び巡る この度の 契りは堅く いつまでも
徳様よりの 身請けの話 はかどらず その後便
りも 途絶えがちにて 氣遣かわし 大阪中を
尋ねんとこそ 思えども 尋ぬる術よも なきまま
に 籠の鳥なる 我が身の上 今日幸い 観音

巡り ひたすら祈る 観世音 仏の現世 利益にて 比翼の鳥の 栖^{よか}得ん 見渡せば 南無観世

音菩薩様 三十三の化身の済度 ゆかりの三十三

個所の 霊地 霊仏 寺社 仏閣 今日の内には

太融寺 長福寺 重願寺 本誓寺 心光寺 大覚

寺 金台寺 大蓮寺 巡り巡りて 数々の 仏に

祈るは ただ一つ 恋の成就と 現世での 福德

円満 長寿なる

駕籠かき(老人) お初様、ここを下れば、すぐさまに、生玉の本

誓寺。日も傾きぬ。急いで駕籠にお乗りあれ。急がんと

のを。

お初 はい、急ぎましよう、乗せて下され。

駕籠かき(老人) お初様。世のことわざに言う通り、『上り道こそ

やさしけれ、下り道には 難儀あり。』おいよ、相棒。

こここそ、駕籠かき正念場、下り道には、難儀あり。

駕籠かきとお初 三人の下り坂道を行く振りの 舞踏

駕籠かき(老人) お初様、橋にかかります、お気を付けて下され

よ。

駕籠かきとお初 三人の橋を越える振りの 舞踏

駕籠かき(老人) どうぞ、お初様、お降り下され。お初様、ここ

が大阪一の本誓寺、御利益、霊顯すぐにあたらかな、観
世音菩薩のおわします。

お初 駕籠より降りて 観音を拝む

お初 お二人さまよ、御苦勞様。お疲れであろう。ここに僅か

の銭の有り。お茶でも飲んで、お休みあれ。

駕籠かき(二人) お初様、毎度ありがとうございます。

二人 退場

お初 観音の前に出て、香を焚き、祈る。

徳兵衛 陰より、うろうろと登場。お初を見付け、声をかけ

ようとすが、気を変え、しばらく、そこに立つて様子を伺

う。

お初 (うやうやしく)

(歌) 謹みて 観世音菩薩様を 拝し奉る 南無観世音

我らを 救い賜えかし この苦界より すぐさま

に お救い下され 観音様 徳兵衛様と 夫婦の

約束 かなえて下され 二人の仲は いつまでも

別れる事の無きように

徳兵衛 (感動して) お初。

お初 (喜んで) ああ、お前様は徳兵衛様。ああ、これこそ、

観世音様の御利益か。徳様、お前は どうして、ここへ、



三場 求神

この寺に。近ごろ何故、天満屋にはお越しでないか。

徳兵衛 お前と別れし、あの日にちようと、親方よりの無理な縁談、お芳との結婚話 そんなこんなで。

お初 それで、お前は。

徳兵衛 無理な話に従わず、叔父上のお怒りに触れ、来月七日に

結納の銀三貫目を返さねば、直ちに大阪追い出されるはめ。

お初 そんなに多額の金銭を、我らが、どうして返されようか。

徳兵衛 (錢袋を取り出して) お初、これ見よ。

九平次 登場。お初と徳兵衛を見付け、慌ただしく隠れ、二人の様子を窺っている。

お初 (銀子を捧げもち、喜びに耐えない様子で) あ、あ。

徳兵衛 ここには、お前より預かりし二貫目、私の蓄え一貫目、それに加えて、在所より集めて来たる三貫目。合わせて

五貫目、ここに有り。

(銀子を捧げ、一息ついて、涙ながらに) 五貫目、五貫目。徳兵衛様。これで私の身請けも叶う。観世音菩薩様。

身請けが叶う。徳兵衛様よ。観世音菩薩様。あなた方への感謝の気持ち、私には、いかにしてかは 示すべき。

(ひざまづく)

九平次 嫉妬の呻き声を上げ、陰に隠れる。

ことの、自然と浮かんで、まいりまするが。

徳兵衛

(急いで、お初を助け起こし、感動しながら) お初よ、

(歌) 姉や妹の お女郎様と 名残惜しやの お別れ申

我らには銀子あり。身請けもすぐに叶うこと。これほど

し 籠の内より 飛び立つ小鳥 羽音うれしや

嬉しきことあらじ。何故それほど涙が出るや。

いざさらば 新しき果に 帰らなむいざ 我が家

お初

(涙を拭きながら) あな 嬉し。我が嬉しさは、いかばかり。

なるこそ 嬉しけれ

徳兵衛

よくご覧ぜよ。観世音様は、お前をお笑い召さるるよ。

徳兵衛

(歌) 新しい結び 祝いの宴 祝杯の 幾重なりて おし

お初

お初、お前の拝む観音様、お名前いかに、知りたるや。

お初

(歌) 新しき 主の始む 醬油店 新しき 店の作り

お初

徳様は、ご存じか。

お初

(歌) 新工夫 新しき 品の数々 売り始め

徳兵衛

知らぬこと。

徳兵衛

(歌) 朝は早起き 露払い 夜は入り日に 店終い 比

お初

(うきうきとした調子で) 子授け観音様よ。

お初

(歌) 永き悲しみ 憂き勤め 今は嬉しき 闇の内 楽

徳兵衛

(わざと聞こえない振りをして) ええ、何という。

お初

(歌) しみ常に さんざめく

お初

(声を大きくして) 子授け観世音。

お初

(歌) 二とせ三とせ 経つうちに 子授け観音 利益に

徳兵衛

これはまあ、子を授けるとは、夫婦の時、娘のお前が、

徳兵衛

(歌) 二とせ三とせ 経つうちに 子授け観音 利益に

香を焚き、祈るとは、なんとも気の早いこと。

て 子宝可愛い 親子連れ

お初

(顔を赤らめながら) あなた

お初

二人は、歌に合わせて連れ舞い。美しい空想に浸っているう

徳兵衛

(声高らかに) は は は。

お初

二人は、歌に合わせて連れ舞い。美しい空想に浸っているう

お初

(口を覆いて、忍び笑いで、語らず)

お初

駕籠かき(二人) 陰より「お初様、どうぞ、お駕籠に。」声を

徳兵衛

(心を込めて) お初、お前はなにを願うのか。

お初

かける。

お初

(向き合いながら) 徳様、私にはこんなに、嬉しき日の

お初

徳様、それでは、お別れを。

徳兵衛

お初よ。徳兵衛は、叔父上と談合済まし、すぐにお前に知らせよう。

お初

初は、徳様敬いて、別れを告げむ、いざさらば。

お初 退場。

九平次 わざと頭を垂れて、気落ちした様子で、登場。

九平次

ああ、徳兵衛さんよ、ご無沙汰、ご無沙汰。近ごろ景気も良さそうで、所得とろく顔の、うらやまし。おい。

徳兵衛

なんの、なんの。叔父のお陰が無いならば、俺にはなんも出来ぬこと。それにしても、九平次兄貴は、景気が悪そうな。

九平次

ああ、お前の景気、金運にあやかりたいが、運も無し。金運の二字、授かれば、我すぐに。

(歌) ああ、腹の立つことよ 近ごろ 油相場の 激し

くて 大きな値動き 利多し 非道の売り主 油

に粥を混ぜ 引つ掛かったは 我が因果 七貫目

七貫目 大損よ

徳兵衛

九平次兄よ、お困りのときに、差し出がましきこと言わじ。何故、油屋お年寄り、お救いの手、貸し賜わぬや。

九平次

(歌) 父は 手助け がえんぜす。ただただ 債鬼の 迫るのみ 来月四日に 金策の 当てあれど 月

末の関 越え難がし 我が弟よ 男気あり 友の

災難 救い賜え 我に五貫目 貸して賜べ 天の

助けよ 命の親よ

徳兵衛

(思案して) 今日二十八日か、確かに来月七日には、金の返せる当て有りや。

九平次

君子の一言、口に出せば間違ひ無し。我九平次が、観世音菩薩に懸けて、誓いを立てたれば、もし来月の七日まで、返さぬときは、我は地獄の釜に落ち、永き寿命を捨ててべし。我が弟よ、愚かな兄の、命の親、救い賜え。

徳兵衛

(思案を定めて) 九平次兄。今我ここに五貫目の銀子持つ。来月七日に要る金子、もしも四日に返るなら、しはし兄貴に貸すも良し。急の危機をば凌ぐべし。(銀子を貸す)

九平次

(銀子受け取り) ああ、正しく、観世音菩薩様の霊頭か。われは観音様に 額付かん。我が兄弟にも額付かん。

徳兵衛

兄弟ならば、助け合うのは、当たり前。なんの不思議のあることか

九平次

しばらく、我らの仲は、親兄弟も同然と、言えども、ただの口約束は当ても無し。証文書かん。我らが証文書く上は、(書き終わると) 念入れ、印判断し置くべし。(印

判を押す（徳兵衛に手渡す）

徳兵衛

証文こそは、正しく君の手になるもの。

九平次

借りて返さぬものならば、正しくそれぞ、小悪人なる。

（にやりと不敵な笑いを見せながら）

幕降りる。

第四場

前場より八日以後 七日

大阪の街角 茶屋

開幕 中幕の前で

長蔵 あわてふためいて 登場

長蔵

（語り） 平野屋の主人 近ごろ 不機嫌で あたかも

閻魔大王の この世に 生まれ変わられし 今日

も今日とて 徳兵衛を 探して来よとの 厳命で

果たせぬときは この俺を 海の藻屑と せんと

かや

こんなな広き大阪の 街角隅々探せども 徳兵衛さんの

影見えず いずこを探し求めんや いずこに行きて尋ね

んや。

徳兵衛 内より「急ごうよ」と叫びながら、慌てて登場。

徳兵衛

（歌） 目前に 七日の期限 迫りたり 九平次の奴 あ

ちこちに 隠れ回って 銀子返らず 大阪の 町

の四方を 尋ねべし。

長蔵

（徳兵衛に出会う） ああ、お前さまは 手代の徳兵衛か。

徳兵衛

（ぼんやりしたまま） お前は、お前は、九平次か、銀子

は何故返さぬか。

長蔵

（様子がよく判らないまま） 手代さま、私、私、私は長

蔵。

徳兵衛

おい。

（歌） 九平次に 追い詰められて 俺はただ死人同然

長蔵

（よくよく考えながら） 手代さま、お前の探しておられ

るは、油屋の、あの九平次ではありませぬか。

徳兵衛

正しく、それよ。お前は、彼の居所を知っているのか。

長蔵

つい先程、あなたを探しているときに、見掛けたが、彼

は仲間の数人と その茶屋で、酒盛り中。

徳兵衛

（ぼんやりしたまま） お前は、確かに見たのかな。

長蔵

私は、確かに知っている。

徳兵衛

さあ、連れて行け。

長蔵

はい、はい。

二人は急いで、舞台を回る。中幕開き、茶屋の場となる。

二人は 殴り合いを始める。酒飲み仲間が加わる。長蔵は逃げ出す。

立ち回り・殺陣。徳兵衛は多勢に無勢で、散々にやられてしまふ。

九平次 (仲間に向かつて) おい。みんな、まず、役所に届けて

おいてから、天満屋に出掛け、散財しよう。

仲間と、九平次は退場。

中幕閉まる。

徳兵衛は、舞台裏の合唱の音楽に合わせて立ち上がり、一札

して佇む。

伴唱

(歌) 天よ、天よ。この冤罪を 晴らすため 行くべき

所ありやなしや 我が受けし この恥辱こそ 誰

か哀れむことあらめ 叔父上 叔母上 何の面目

ありて お目に掛かれましよう お初の身請けも

叶わぬ事 いかにせん いかんにせん せん方な

し

すこすごと ゆっくりと 退場。

幕降る。

第五場

前場と続く時

天満屋内

開幕

お初 花嫁衣装を縫っている。

お初

(歌) 明月の 高き楼閣 照らす時 月の光に 君懐い

遙かの君に 日毎に刺すは 花嫁の 晴れの衣装

の花刺繡 千尋の糸の 刺繡には 花嫁の夢

まざまざと 徳様と 私を結ぶ 縁しの糸の 紅

ければ お初の願い 叶いつつ 生きて甲斐ある

幸せの 七日の夜に 気掛かりで 窓辺によりて

君待てど 徳兵衛様よ 君はまだ 人影もさえも

見えざりき

徳兵衛 破れ笠で顔を隠し、よろよろと登場。

徳兵衛

(歌) お初はさぞや 我のこと 気遣いつらん 哀れや

な 会いて我が事 知らせたし 思わず到る 天

満屋の 前を歩みつ 立ち止まり

お初

(歌) 君思い 君を偲べば 窓辺にて たちまち知る

君のかんばせ

二人は、お互いに相手を見付ける。

お初 ああ、徳様。

徳兵衛 (しょんぼりとしたまま) お初、俺は、なあ。

(歌) 君を慕いて 我はただ この廓まで 来たれども

傷の痛みに 耐えかねる 言わんとすれど 声も

なし

お初 (外に出て、徳兵衛に会い、その哀れな姿をいぶかる)

(歌) 徳様の 衣装は破れ 傷付きて 痛々しさはい

かばかり 顔や手足も 泥まみれ その恥ずかし

めは 我が為か

徳兵衛 俺は、ああ。

伴唱 (歌) ただ死ぬの 一言ばかりは 言いがたし この悲

しみは 我が胸を 押し潰さんと するばかり

「お初よ」 今よりは 総てに心遣いして 幸せ

にこそ 暮らせかし 二度と再び 徳兵衛の事は

心に置くな 忘れよかし

徳兵衛 お初よ、我は行くぞ。(徳兵衛は、行こうとする)

お初 徳様、待って。

お初が徳兵衛を連れて、天満屋に入る。

妓楼主人とお春登場。お初は徳兵衛を物陰に隠す。

妓楼主人 お春、お春、こんな時刻に、うろうろと、早々お客のご

接待を。

お春 すぐに、参りまする。

妓楼主人 お初、今日はお前に吉日よな、口開けのお客が、お前を

の待つ、早々御もてなしを。

お初 はい。

幕内より、人の声あり。「ご主人様、早く御出でを」

妓楼主人 おお、今行く、今行く。(退場)

お初とお春は耳打ちして、お春に見張りを頼み、隠してもら

いながら、お初は徳兵衛を着物の裾に隠しつつ、二階に上が

る。お春は退場する。

お初 (歌) 災害は 突然襲う 俄か雨 未だ様子は 知れざ

るも 君はしばらく 休まれよ 今夜はここにて

子細をば

お初 (徳兵衛の傷の介抱をしながら) 徳様、これは、これは、

まあ、どうして、かかる様なるや。

徳兵衛 俺は、ああ。

お初 徳兵衛様、徳様に何の愁いのあつたるか、お話しなされ

て下されよ。私には判っている、定めし、初が種となり、

お前に難儀の掛かりしよな。(お初は泣き出す)

徳兵衛 いや いや、お前を恨むことはなし、おのが軽率恨むの

九平次 (大威張りで) 天満屋の皆の衆、既に伝え聞きつらん、

み、馬鹿げたことよ。

徳兵衛めが偽判作り、俺から金を騙しとらんとせしが、

証文を出して、お初に見せる。

我らに教え諭されて失敗せり、これから以後は、徳兵衛

お初 (証文を見て) あの九平次め、未だに銀子、返さぬか。

め、どの面下げて、この天満屋に来られようか。(大笑

徳兵衛 九平次め、銀子返さぬのみならず、我に偽判作りの、偽

いする)

証文作りのと、かえって逆に、汚名を着せ、その上彼ら

二階で、お初と徳兵衛は、身を隠して、聞いている。

は、仲間数人集め来て、散々に我を 打ちのめす。(着

九平次 あの徳兵衛めに替わって、俺がお初の身請けする、身請

物を脱いで、傷を見せる)

けの金はいかほどか。

お初 (涙ながらに、徳兵衛を介抱し) 徳様。

妓楼主人 ええと、三貫目、三貫目で。

(歌) 徳兵衛様の この手傷 痛々しきとも 痛々し

九平次 よしよし、ここに十貫目の金がある、今晚からはお初様

誠の人を 天道さま 何故痛め給うかや

は、俺が買い切り。

徳兵衛 (歌) 身請け話も 夢幻しと 消え果てし

金を妓楼主人に手渡す。皆は訝る。

お初 (歌) 我が恋は 始まりし時 終われるか

二階で、徳兵衛とお初は、痛苦を堪えている。

徳様。

妓楼主人 九平次様、ありがとうございます。お初は二階におり

九平次は衣服を美々しく整え、友達二人と登場。

まする、二階にどうぞお上がりを、さあ、ご案内致しま

天満屋に入つて来る。妓楼主人出迎える。

しよう。

九平次 おい おい、天満屋の皆さん方よ、さあ、さあ、聞いて

九平次 要らぬこと、お初は今や我が女房、我らが友に、それぞ

くれ。

れに相手をあてがうべし。

妓楼主人 ああ、九平次様、良くお出で。どうぞ、お座りなさいま

妓楼主人 はい、はい、お春よ お恵よ、早くお客様に。

せ。

お春は心配そうに、お恵や九平次の仲間達と退場。

妓楼主人 九平次様、何でも御用のあれば、お呼び下され、階段に

九平次

はお気を付けて。

親友、俺はあいつを親友にしてやったのに、あの徳兵衛には信義なし、なんとも情けのなきものよ。

九平次

お前は忙しそうな、俺は上がるぞよ。

お初

何故に、不信不義なるや

妓楼主人 退場。九平次は二階に上がつて来る。

九平次

お初よ、それなら、いきさつを教えてやろう。みんなお前から起こったことよ。

お初は、徳兵衛を机の下に隠す。

九平次

(部屋に入つて来る) お初よ、おお、最前の下での俺の

(歌) お初 初めに 善きことは 新茶の出花 善き香

話したこと、みんな聞いたであろうがな、この大阪では、

り 初春の 春の情けの 潤ひて 人惑わせる

三歳の女の子でも知つている、徳兵衛めの今度の偽判作

美しさ 徳兵衛めらに のめのめと この美人

り、人の金を騙し取るような大詐欺師。徳兵衛に替わつ

奪われてなるものか 身請けの噂 聞くよりは

て、俺がお前の身請けする。もうこの天満屋には、徳兵

一嫉妬の心 燃えまざる この上は 彼に教え諭し

衛二度と再び来られまじ。

て 知らしむべし お前を廓に 留どめ置き と

徳兵衛は怒りを押さえ兼ねるが、お初が止める。

もに良き宵 過ごさんため

お初

九平次様よ、徳兵衛は金も力もなき上に、ただの独り身、

お初

(素知らぬ振りをして) 教え諭すとは、お前は彼に何を

彼が、彼が何故、あなたを相手に仕掛けたりしや

教えしや。

徳兵衛は更に怒りを押さえて、机の下に隠れ続ける。

九平次

俺は、お前は何故に、そのようなこと聞きたきや。

九平次

お初、彼が勝手にやったこと、自業自得よ、お初、これ

お初

何故に、何か疚しきことのありや、九平次様、私とお前

から以後は、お前の心次第に。

の仲なるに、初になにとぞ真のことを、教えて下され、

お初

(お茶を差し出して) 九平次様、お前様と徳兵衛とは、

九平次

もし私をば、愛しと、おほしめされるほどならば。

元々無二の親友と、承知しておりましたに、彼は何故に、

九平次

(得意になりながら) おお、お前には、良し良し、真の

お前様を騙そうとは。

ことを教うべし。

(お初にささやく)

お初 (怒りながら) ええ、元々は、お前が彼を騙せしか。

九平次 おお、このたくらみも、元はと言へば、お前のため、や

むなく計略立てしなり。

お初 お前様のお心の、なにとも、うれし、かたじけなし、九

平次様よ。そのようにお氣遣い下されしは、あの徳兵衛

に、このわれが身請けされようと、この初を、愛しい

ところぞ、思われじや。

九平次 本心、本心、信ぜずや。我は天地の神かけて、もし九平

次に一点の嘘偽りのあるならば、地獄の釜に落ちるもよ

し、後世の救いも要らぬこと。

お初 そう言われるからは、私と夫婦になりて、共に白髪を生

えるまでか。

九平次 (からかいながら) 共に白髪の生えるまで、はははは、

お初、俺が今朝から酒飲んで、未だに酒酔い機嫌と思っ

てか、明日は明日の風が吹く、青春は移り易し、人生と

は何ぞや、俺には金も力もあり、お前はこの天満屋で、

この俺の相手になりて、楽しむべし、ぶらぶらとしたい

放題、この上無しよ。

ええ、ぶらぶらと。

お初

九平次 おお、ぶらぶらと、悠々と。

お初 ええ、そんなに、したい放題で。

九平次 おお、したい放題で。

(二人で大笑いして)

お初、俺の。

九平次め、悪党よ、初と徳兵衛はな、徳兵衛様とは、幼

きときより、仲良くて、幼なじみの恋心、井筒むすめと

業平の、世にありてこそ夫婦なれ、死しても同じ比翼羸

我はからずも、苦界に沈み、浮かばれず、徳兵衛様は、

この我を厭われず、慈しみ給いたり、汝、九平次、徳様

と常日頃、親兄弟と称せしに、親友ともに相助け、初を

苦界の海より助くとは思わずや、さて、お前様、金と力

のあるとても、情けも義理もなきなりや、自ら金を騙し

取る、徳兵衛様は、おとしめられ、無実の罪に苦しまる。

更にまた初に死ぬまで、遊女暮らしせよとか、人従え

て喜ぶか、汝の良心いずこにや、天の道理も無きことし、

お前のなさる悪巧み、末恐ろしきばかりなり。善人なる

を陥れ、信に反して義を捨て、恥ずかしげもなき所業、

衣装を着たる鳥獣に似たるなれ。天網も、今日このごろ

は、漏らすなり。王法までも無かるらん。

九平次

(次第に怒りながら) 王法、は、は。我は真実語るなり。既に役所に、このことを届けておくが、徳兵衛は未だ役所に届けられず。もし、彼、役所に届けなば、飛んで入る夏の虫、たちまち、自ら滅ぶは必定なり。

徳兵衛

天地こそは広ければ、我にも帰る家のあり、いざいざ、さらば。

お初

(驚く) それは。

お初

徳様。

九平次

お初よ、こんな心に欺かれ、それでも共に死ぬる気が、生きてこの俺、九平次様に、従うべし。

花嫁花婿の衣装を背中に背負い、徳兵衛の後を追って、階下に降り、去る。
幕降る。

お初

(剃刀を突き付けて) 九平次め、お前が我に、近付くなら、お前の前で死んで見しよう。

前場に続く

九平次

(慌てて止めて) 死ぬなよ、死ぬなよ。

心中 道行 大阪 曾根崎の森

お初

さあ、お前は、私と、さあさあ。

開幕 深夜 星空のきらめき 鐘の音しきり

九平次

よしよし、俺は帰るが、お前は俺の籠の鳥、今日は自由の身なれども、明日は囚われ、籠の鳥、明日また会わん。

徳兵衛 陰にて歌う。

徳兵衛

(歌) 夜深々と 更け渡り 風簾々と 吹きすさぶ 冥

階下に去り、退場。

徳兵衛は、机の下より出て来る。

徳兵衛は乱れ髪のまま、よろよろと歩み出る。

徳兵衛

(苦しげに) お初、いろいろ迷惑を。いざや、別れを告げんまで。

徳兵衛

九平次の、悪党めが。

げんまで。

(歌) 九平次め 騙したり ああ 騙されたり この恥辱 この屈辱の 晴れざらん 大阪中の 何人か

(思い詰めた様子で、下に降りようとする)

お初

徳様、あなたは、どこに行かれるぞ。

我らが無実 知り得んや 我ただだ独り 寂しくて

六場 殉情



既に死したる ごとくなり 人の世に 別れを告
げん この憂き世 いざや捨つべし

お初よ。

(歌) まこと哀れは お初にて 他に救いの 当てもな
し 夜毎に流す 血と涙 廓住いの 流れ唄 花
散り人の 老ゆ時も 慰むる人 更に無し これ
を思えば 涙雨 河の水量も 増さるべし

お初 陰より叫ぶ

お初

徳様、待って。

徳兵衛は振り向くが、呼ぶ声に従わず、急いで行く。

お初は叫び続けながら、追い掛けて来る。舞台を回り、倒れる。

徳兵衛

追い掛けて来て、何とする。

お初

徳様、愛しの人よ、君もし死なば、我もまた、この世にはあるまじよ。君と共にが、我が願い。この世の願いは、ただ一つ。蓮華の花に、座せんこと。

徳兵衛

お初、お前は、いまだ年若し、死んではならぬ、死ぬべからず。

お初

徳様。

(歌) 死ぬに 齢の若きこと なんの障りになるべきや

桜の花の 散り際の 愁いを含む 美しさ 君に
捧げん 我が情け 我らが心中したる様 歌わば
歌え 笑わば笑え 我らが夫婦に なるとても
今宵限りの 夫婦なり

徳兵衛

お初、我が妻、愛しの妻よ。

お初

徳様、私も一緒に、一緒に連れて行かんせよ。

徳兵衛

おお、おお。

二人の心中道行

お初

(歌) 遙かに望む 大阪城 夜空に暗く 影も無く

徳兵衛

(歌) 天満屋の 初花の 倅薄くして 影淡し

お初

(歌) 愛しの人と もろとも 心中すれば 死して後

必ずあの世は 極楽と 古き歌謡の 教えたり

徳兵衛

(辺りの様子を見定めて)

ここは、曾根崎、天神の森。この場に、死に場所しつら
えん。我らが、心中最期場を、よくよく、お前も見定め
よ。

お初

(四方を見て) 何の異存のあるべきか。

持つて来た、包みを開く。

ご覧あれ。

徳兵衛

花嫁衣装か。

お初

これやこれ、我が自らに、針を刺し、晴れの日のため、
縫い上げし、花嫁衣装の、紅小袖。徳兵衛様。お前とわ
しは、今ここで、夜空の星と、森の木々、仲立ちにして、
夫婦の契り結びたし。

徳兵衛

夫婦の契り、華燭の宴。よし、よし、いざや。

お初

二人は、衣装を着て、赤い花飾りの長い布で、婚礼の場所を
しつらえ、天地を礼拝する。

徳兵衛

天地を拝し、御堂を拝し、夫婦固めの、互いの礼拝。

お初

徳兵衛様、我らが故郷、石上の『筒井筒』の歌、聞かす
べし。新妻の再び歌う、出会いの歌は、一ついかがで、

ござりましょう。

徳兵衛

おう、おう。

お初

(歌) 夫を恋うる 人の名は 井筒とこそや いいけら

し 時も所も 古きこと 石上村の物語 隣に住
むは 在原の 業平という 優さ男 井筒とやら
と 幼な子の 幼きままの 恋心 百年の 契り

も 永く 離れまじとぞ この世の夫婦 一つ家

あの世の蓮 比翼塚

夜明けを告げる鐘の音、しきりに響く。

二人は抱き合う。赤い長布のそれぞれの端で、二人の体を縛

る。

徳兵衛 (歌) 暁の 七つの鐘の 寂しやな

お初 (歌) 人玉の 我先立つ 夜明けなる

徳兵衛 (歌) 父母よ 不孝の罪を 御免なれ

徳兵衛 叔父様、叔母様。我こそは、幼きときに父母に、先立た

れしを、叔父御叔母御の御恩お陰で、成人す。御恩徳に

は、必ずや不肖の男、徳兵衛もあの世でなりとも、報ゆ

べし。(礼拝する)

お初 父上様、母上様、親不孝なる、この娘、お二様にご挨拶。

(礼拝する)

徳兵衛とお初が、それぞれ同時に言う

徳兵衛 父上様母上様、あなたの息子、徳兵衛なり。

お初 お舅様お姑様、嫁の、お初でござりまする。

徳兵衛 お二様、ご機嫌いかがでござりまするか。

お初 お二様、ご機嫌いかがでござりまするか。

二人礼拝する

徳兵衛 人の世の、永き別れよ。

お初 人の世の、永き別れよ。

二人 (歌) 人の世に 別れを告げて 暁に 冥府への道 た

どり行く

徳兵衛は、お初の用意して来た、赤い花飾りに付いていた長布で、二人の腰をくくり付ける。

徳兵衛は、短刀を抜いて、何度も躊躇しながら、お初を刺そ

うとするが、刺せないで短刀を落としてしまう。お初は拾い

あげ促す。どうしても刺す事の出来ない徳兵衛の短刀に、お

初は手を添えて、自らの胸を刺す。

徳兵衛 (悲痛な叫び) お初。

すぐに、自分もその刀で自害する。

二人は手を取りあって、仰向けに倒れる。壮麗な死。

並んだ二人の遺体に、スポットが絞られる。

徳兵衛の胸に短刀が光っている。

幕次第に下りる。

静かに開く幕の前に、結婚式の赤い花飾りが浮かび上がる。

再び、幕下りる。

あとがき

近松門左衛門の『曾根崎心中』が、中国の古典劇のひとつである漢劇によって『曾根崎殉情』として上演された。武漢漢劇院青年実験団による、一九八八年一〇月の中国の武漢市にある江夏劇場での

公演であった。そして同年一月二日・三日の両日、兵庫県尼崎市塚口の「つかしんホール」で日本公演が行われ、好評を博した。

ここに、その漢劇『曾根崎殉情』を日本語訳して、紹介するのが、最初に漢劇の脚本を書いた作者であり、武漢漢劇院青年実験団の団長であり、日本公演の際の副団長であった方月仿が、公演のパンフレットに寄せた紹介文の翻訳から始めた。

中国漢劇『曾根崎殉情』は、日本の著名な劇作家近松門左衛門の原作『曾根崎心中』を、向井芳樹（日本）と方月仿（中国）が改編したものである。

この劇は、日本の徳川幕府の時代、遊女お初と醬油屋の手代徳兵衛の純真な愛情を描いたもので、封建勢力の若い男女への圧迫や、親友からの手ひどい裏切りによって行き詰まり、日本の若者が自由な恋愛の成就を求めながらも、それを果たすことのできない状況の中で、死をもって抗議し、その愛を貫こうとした悲しい心を歌い上げたものである。

日本の同志社大学向井芳樹教授が、武漢漢劇院青年実験団に、この劇の上演を薦められた。中国と日本の演劇人が、両国のそれぞれの古典劇の優れた長所に学びながら、共に発展して行く契機を求めようというもので、両国の演劇史上初めての試みとして意義の有ることだという理由であった。

我々は、近松の原作の精神的な基盤をしっかりと把握し、原作の主題や情感を保ちながら、中国の「場面分け」の戯曲構成に従い、「重逢」「逼婚」「求神」の三場を付け加えた。登場人物の行動や人名・地名などは変更しないことを基本にした。脚本の改変に当たっては、演出・演技・衣装・舞台美術などは、「中国式」を採用し、中国演劇の『歌舞をもつて物語を演出する』という特徴を生かすことにし、中国演劇の「唱・做・念・打」の独自の技巧を發揮して、鮮やかに感動的な芸術的形象を目指した。同時に日本の俳句形式を取り入れて、五言七言の詩句を作ったり、謡曲の『井筒』の詞章を取り入れて、日本的な情緒を取り入れた。次に、漢劇『曾根崎殉情』と『曾根崎心中』の違いについて触れておきたい。

現在は上演されないが、「観音巡り」の道行が、原作の『曾根崎心中』の最初に付いていて、お初が一人で、自らの恋の成就を願って、大阪三十三所の札所を参詣して廻る場面があり、続いて生玉社の場面が始まる。現在の歌舞伎・文楽はいずれもここから幕が開く。ここで偶然出会った二人、心配するお初に、徳兵衛は親方からの縁談を断つたため、二人の仲が難しくなったことを語る。更に、遊び仲間の九平次に親方に返すはずの二貫目の銀子を貸して、まだ返してもらえないことを告げる。現れた九平次に逆に偽の証文を作って

金を騙し取ろうとしたと陥れられ、徳兵衛は絶対絶命の境地に立たされる。次の天満屋の場面で徳兵衛とお初は二人で死ぬ以外に道のないことを知り、心中の約束をし、ひそかに抜け出して死への道を急ぐ。最後は、心中の場所までの道行と、曾根崎の森での二人の悲しい心中が演じられる。

「曾根崎殉情」では、新たにこれに、三つの場面が書き加えられている。

第一場《重逢》（幼なじみの巡り会い）

遊び仲間の九平次に連れられて、徳兵衛が天満屋に遊びに来て、遊女になって幼なじみのお初に偶然出会う。『伊勢物語』の

筒井筒の井筒にかけしまろが丈

過ぎにけらしな見ざるまに

の古歌の通り、幼なじみの恋の約束が蘇り、二人の愛が芽生える。

近松が書かなかったお初徳兵衛の二人の仲が、その出会いのところから描かれる訳で、初めて二人の悲劇に触れる中国の観客にとつては、この説明の部分は欠かせない所である。急速に燃え上がった幼なじみの恋のいじらしさと、お初の琴の演奏と、袖についた長い布を振る舞いが見所になっている。

第二場《逼婚》（親方からの無理な縁談）

原作では徳兵衛の話の中で語られる部分を舞台の上で見せている。

親方で叔父の九右衛門夫妻からの縁談は、本来は徳兵衛にとって良話であるはずだが、お初との約束がある徳兵衛には、無理難題ということになる。徳兵衛は自分勝手に、自分で貯蓄した一貫目と、お初の貯蓄した一貫目と、親方から借りれるはずの一貫目の、合計三貫目の銀子で、お初を身請けしようというのである。しかし、逆に徳兵衛の実家に既に渡してある結納金の三貫目を返せと叱られ、返却には一か月の猶予を与えられるが、結局は家を追い出されることになる。

第三場《求神》第一景 郊外（恋の祈りの観音巡り）

お初が徳兵衛との結婚を夢見て、独り駕籠で観音巡りをしている。二人の駕籠かきと、乗っているお初との呼吸を合わせた駕籠の振りは、中国古典劇の独特なもので、江戸時代の日本式の駕籠ではなく、輿である。お初が参詣する観音の中に「送子観音」が出て来るが、これは「子授け観音」のことで、結婚もしていないのにと、徳兵衛にからかわれる場面がもしろい。

第二景・寺社（恋の嫉妬の悪巧み）

ここでは、折から遊山に来ていた九平次が、二人の話を立ち聞きし、嫉妬の為に徳兵衛の金を騙し取る計略を立てる。徳兵衛は結納金の三貫目と自分がもっていた二貫目の合計五貫目をまんまと九平次に騙し取られてしまう。

第四場〈討債〉（力づくでも返らぬ銀子）

原作の生玉社の喧嘩場の返してもらえない銀子を巡る力づくの争いがある。中国古典劇の立ち回りは有名であるが、ここでは今までのどの「曾根崎心中」劇にも見られなかった凄まじい立ち回りが用意されている。金に命のかかっている徳兵衛の必死の戦いのもつ哀れささえ表現された新工夫の「殺陣（たて）」であった。

第五場〈情会〉（悲しい出会いも今宵限り）

原作の天滴屋が少し簡略化されているが、ほぼ忠実に再現されている。中国古典劇では舞台装置に机と椅子しか使わないので、縁の下に徳兵衛を隠すことが出来ない。そこで机の下に隠れることにならる。心中の決意の場面にはなっていない。徳兵衛が死ぬことを覚悟して出て行くのを、お初が後ろから、花嫁衣装を持って追いつけて行くように変わっている。

第六場〈殉情〉（死に装束は花嫁衣装）

心中道行と心中場が描かれる。ここでは切々と歌う二人の悲しみの歌と、お初の用意した花嫁衣装で心中する趣向が最大の見せ場である。中国の花嫁衣装は日本と違って、真っ赤な衣装である。二人だけの結婚の場が死に場所であることの悲しさが見事である。

中国古典劇には死ぬ表現の型として、立ったまま後ろに仰向けに倒れる型がある。二人が揃って倒れる型は、多分中国にはなかった

はずであるが、漢劇の新しい型としての心中を創造してくれた。お初役の女優邱玲は、この場の演出の型が決まったときから、すぐ練習を始め、何度も頭を打って脳震盪に近い症状に耐えながら見事に完成させた。

さて、「曾根崎殉情」は第一稿の時から、三度にわたって改訂されたが、今回の上演台本は、第三稿目で翻訳したものであるが、舞台の上での手直しは頻繁に行われており、それらを網羅的には捉えきれない。

中国の古典劇の上演に当たったの稽古の期間は、今回の場合は九月で、普通の長さであるが、その結果舞台の関係者は俳優・演出者は勿論のこと、裏方の照明効果に至るまで、誰も台本をもっていない。日本公演でも持参の台本を見ることが出来なかった。音楽の担当者が譜面を備えていたが、全員が暗譜しており、稽古の間は勿論、本番でも実際には譜面は見えない。

公演の舞台に合わせて、この翻訳にも若干の補充を加えたので、日本公演の時に用意した「スライド字幕」や「解説リリース」の科白と異なる所があることを、お断りしておきたい。舞台で実際には演じられなかった部分もあったが、削除は原則的にはしなかった。

第一稿の翻訳に当っては、本学大学院修士課程修了の文学修士・康小青の援けを借りた。